人間研究学域　入学前課題講評

今回の入学前課題では、例年同様、人間研究学域での学びと密接に関連する五つの著書を課題テキストとして指定し、その中の一つの文献について、要約と批評を課しました。以下に全体の講評と文献別の講評を記します。

【全体の講評】

- 課題テキストの内容を大幅に逸脱した要約は見当たらず、みなさんそれなりにきちんと文献を読み、その内容を理解している様子が窺われました。
- とはいえ、課題を説明する際に添えておいた、「大学生となるにふさわしい、学術的な論旨構成や文章表現を心掛けること」という条件を十分に満たしていた人は、ほぼ皆無でした。その点を不安に思う人はもう一冊別の本（『新版 論文の教室』）に目を通しておくようにとも指示しておいたはずですが、その形跡が窺われる人もわずか 1 名しかいませんでした。
- もしかすると皆さんは、本を読むこと、文章を書くことなんて、これまでも当たり前にやってきたことだから今さら誰に教えてもらう必要もない、出来て当たり前のことだと考えているのかもしれません。しかし、残念ながらその考え方は間違いです。というのも、高校までの本の読み方・文章の書き方と、大学でのそれらは大きく異なるからです。大学で求められている文章とは、一言で言えば、「型にはまった」文章です（上記の本にもそう書いてあります）。スポーツでも習い事でも初心者はまず「型」を習うのとまったく同様に、基本を習得してからでなければ応用も利きません。
- 今からでも決して遅くありません。上記の本を購入し、熟読してください。そして、自分が書いたレポートと見比べてみてください。そうすれば、皆さんのレポートが「大学生となるにふさわしい、学術的な論旨構成や文章表現」から大きく懸け離れていることは、一目瞭然であろうと思います。

【鷲田清一『じぶん・この不思議な存在』(15 名)に対する講評】

- 感想文の域を出ないレポートや、著者が本書で論じている問題をすり替えてしまっているレポート、文章中のどこが本書の内容で、どこがご自身の独自見解なのか見分けがつかないレポートなどが数多く見られました。
- そうしたなか、「わたしは真の意味で、いかなる他者ももちえない」という

主張がどのような含意を有しているかを展開していたレポートは、分析や詰めの甘さがあるとはいえ、まさに著者が論じようとしている問題の内部に留まり、著者と真摯に対話しようとする姿勢が窺われるものでした。

【マイケル・サンデル『これからの「正義」の話をしよう』(5 名)に対する講評】

- 著者が最終的に支持する立場（共同体主義）に同調するレポートが半数、功利主義またはリバタリアニズムに対する批判を展開しているレポートが半数でしたが、いずれにしてももっと本書全体を十分に読み込んで、正義にまつわる三つの代表的な考え方の各々をしっかり把握するとともに、その対立構造をもっと慎重に検討してもらいたいところです。
- 例えば、リベラリズムが安易に共同体主義に賛同できないことにはそれなりの理由がありますので（そしてそれは本書からも十分読み取ることができますので)、共同体主義に賛同するにしてもそうしたリベラリズムの言い分もきちんと踏まえて賛同するのでなければ、あまり説得力がありません。

【河合隼雄『子どもの宇宙』に対する講評(7 名)に対する講評】

- 記述内容に賛同し、それに関連した自らの述懐を述べるといった、感想文の域を越え出ていないものが半数見受けられました。その中には、自分自身の経験に引き付けた論述を展開しているレポートもいくつか見受けられましたが、大学でのレポートや論文の場合、自分自身の経験を根拠として何らかの主張を展開しても高評価が得られることはほとんどありえないと考えて下さい。また、著者の言葉尻を捉えて批判を展開するなど、この本を読んだ意義をあまり見出すことのできない不寛容で不当な批判も見受けられました。
- そうした中で、「この子どもの持つ宇宙というものは一体どのようなものなのだろうか」という問いを冒頭付近に掲げ、その問いに対して「子どもの宇宙とは、子どもが心的成長においての道具を得る空間ではないかと考える」という答えを導き出していたレポートは、議論が相当荒削りでその答えにもあまり説得力が感じられないという難はあるにせよ、少なくとも問いを掲げてそれに答えるという論旨構成の上では、大学のレポートにかなり似つかわしいものとして評価することができます。
- また、「秘密」が本書全体を通底するひとつのキーワードであるという視点から、「秘密を持つことは子どもにどのような影響を及ぼすのか」「子どもは人と秘密を共有するとどうなるのか」という問いを掲げていたレポート

も、その問題設定の意義があまり説明されておらず、結果として本書の内容の要約に近い内容に終わってしまっているなど、論評のポイントが見えにくいといううらみはあるものの、レポートに取り組む姿勢としてはさほど悪くないと思います。

【大田堯『教育とは何か』(7 名)に対する講評】

- 自分の思ったことをとりとめなく書き連ねたレポート、著者の意見に賛同するだけで感想文の域を越え出ていないレポートが見受けられたほか、重箱の隅つつきとしか思えない皮相な批判や不当な批判なども目につきました。テキストを論評する際には、まずはその内容を最大限好意的に解釈するという態度が求められることを覚えておいて下さい。

【斎藤環『社会的ひきこもり』(4 名)に対する講評】

- ただ記述内容に賛同するだけといった、感想文の域を超え出ていないものが半数見られました。
- また、著者とは違った角度からの対処方針を提案しているレポートや、社会的引きこもりの現象に対して著者とは異なる分析を示しているレポートもありましたが、その対処方針の意味するところが十分に説明されていない、経験的な事実を根拠とした分析を試みているにもかかわらずその事実が証拠によって支えられていないなど、全体的に低調な印象を受けました。
- そもそもこの種の本は、内容そのものについて論評することが難しい本であり、それを論評の俎上に載せるには相当な工夫が必要です（過年度には、それにある程度成功しているレポートも見受けられましたが)。ジャンルやテーマが自分の興味関心に近いというだけで安易に飛びつくのではなく、そもそもその本が自分の「手に負える」本かどうかを吟味する姿勢が求められていると思います。
- なお、たとえ自分がある特定のジャンルに強い興味や関心があるとしても、そのジャンルについてまともな論文やレポートが書けるかどうかは、それとはまったく別問題です。その点を実感していただくには、ごく最近出版された、小笠原喜康・片岡則夫『中高生からの論文入門』（講談社現代新書、2019 年）を是非読んでみて下さい。中高生を対象にしている本とはいえ、これまでレポートや論文を書いた経験のほとんどない人にとっては非常に参考になる事柄がたくさん含まれていると思います。

以 上